

二次元ぷち文庫

まかい  
おうじょ

# 魔界王女

撃滅のミオレシア



試し読み版

上田なかの  
表紙イラスト：みかん。

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『魔界王女 撃滅のミオレシア 前編・後編』  
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『魔界王女 金眼のファルシア』『魔界王女 白銀のロゼッタ』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

まかい  
おうじょ

# 魔界王女

撃滅のミオレシア

上田ながの  
表紙／みかん。

二次元ぷち文庫

## 登場人物紹介

---

Characters

ミオレシア＝レイブル＝フォルモ＝ラディシュ

魔界六名家の一つラディシュ家の現当主。メリハリに乏しい幼児体型の少女で、魔力も貧弱。尊大に振る舞ってはいるが、魔族としての力は一部の家臣に及ばないほど。

一〇〇〇年に一度開かれる魔神達の饗宴——

己が力を誇示する為、

矜持の為、

家の為、

魔神達が流すは鮮血。

彼らが目指すは魔王の座。

最後の一体になるまで、六体の魔神が殺し合い、血を贅と捧げる儀式——魔神転生の儀。

「なあファガレスタ……先日ボクの耳にこんな噂が聞こえてきたんだが、君はどう思う？  
意見を聞きたいんだけど」

魔神転生の儀に参加する資格を持つ、由緒正しき魔神六名家のラディシユ家現当主ミオ  
レシアⅡレイブルⅡフォルモⅡラディシユは、玉座に腰を下ろし、脇に腹心である魔神カ  
レンⅡスタリストⅡロードバークを控えさせながら、自分の前に静かな表情で跪く家臣フ  
アガレスタⅡリザルドに軽い口調で語りかけた。

「意見とは……それは一体いかなる噂で？ 内容を知らぬことには答えられませぬ」

問いに対し、無感情な声が返ってくる。そんな彼の姿にミオレシア——ミオは唇を噛み、  
青い瞳を獲物を狙う獣のように細めた。

「……聞いた話によると、ボクの屋敷にボクのことをよく思っていない者がいるらしいんだ。このボクを……ラディシユの当主にして、時期魔王候補者たる者に不敬な口をきいている者がいるという」

「不敬な口ですか……」

これを聞いてなお、ファガレスタは表情を変えない。その態度が苛立ちを誘う。

「……ああそうだ。噂によると、そいつはこう吹聴しているらしい——ラディシユはもう終わりだ。時期魔王の目はない。ミオレシアが当主である限り、魔神転生の儀に勝つことはできない——とね。そしてそいつは私を弑するつもりらしい」

口調の端々から怒りが湧き出す。肩の辺りで切り揃えた瞳と同じ青色のショートカットの髪が、中世の将校が身に着けるような煌びやかな軍服を模した赤い衣装に包まれた小柄で、凹凸もほとんどない身体から発せられる異常な魔力で揺れた。

「さてファガレスタ……お前はどの噂についてどう思う？」

語りながらパチンツと指を鳴らす。するとラディシユ城玉座の間に、五体の魔神達が姿を現した。彼らはファガレスタを囲む。

「お前は一体どういう心持ちでそれを口にした？ どういうつもりでボクを……主たるミオレシア||レイブル||フォルモ||ラディシユを殺そうと思った？」

瞳の中に殺意を込める。射貫くような視線を向けた。

主から家臣に向ける様なものではない。が、これを受けてなお、ファガレスタは涼しい表情を浮かべている。いや、それだけではない。家臣は口元に笑みさえ浮かべた。

「何がおかしいっ!!」

玉座の間に響き渡るほどに声を荒げる。

気に入らない。ファガレスタの何もかもが気に入らなかつた。

(主人はボクだぞ! そのボクに……その様な笑みを向けるか!!)

決して許すことはできない。

「何がおかしい……ですか? ふふ、分かりませんか? いや、分かっているはずでしょう。姫様……いや、ミオレシア。それが一番分かっているのはお前のはずだろ?」

言葉と共に家臣は全身から魔力を溢れ出させる。ただこれだけで、ミオの殺意など塗り潰されてしまうほどの力だ。ぶつぶつと鳥肌が立つ。自然と身体が震え始めた。

「……ミオレシアよ。魔神に必要なものをお前は知っているか?」

ファガレスタが言葉を発すると、ただそれだけで胸が押し潰されそうになる。隠しようもない恐怖を感じた。

「それは力だ。敵を倒し、撃滅する圧倒的な力だよ。それは決して血統などではない。この意味が分かるな?」

「そ、それは……」

言葉に詰まってしまおう。

それは決してファガレスタから向けられた言葉の意味が理解できなかったからというわけではない。寧ろ、理解できたからこそその沈黙だった。

「理解しているじゃないか……。そういうわけだよ。そう、お前には力がない。そして俺は力なきものに従うつもりなど毛頭ない。ただそれだけの話だ。だからお前が聞いた噂は事実だ。俺は素直な気持ちで口にし、思ったことを実行しようとした……。それだけの話だ」  
 跪いていた魔神が立ち上がる。口元には薄ら笑いが浮かんでいた。

「さてミオレシア様……。俺は事実を認めたがどうする？ 俺を殺すか？ お前のように無能な小娘がこの俺を殺せるのか？」

ただ薄笑いを浮かべているだけではない。耐えられないといった様子で爆笑を始める。心の底からミオを嘲笑しているのが分かった。

「この痴れ者が!! ボクに……。このボクに不敬を働いた罪——思い知らせてやる!! さあやれっ! その裏切り者を殺せっ!!」

最早容赦はできない。怒りと共に家臣達に命を下す。

しかし——

「ど、どうしたんだよ!! 命令だぞ! そいつを殺せ! 殺せと命じている!!」

魔神達は誰一人動かない。彼らは命を聞かぬまま視線をファガレスタから外し、ミオへ

と向けてきた。家臣達が浮かべる表情——それを見た瞬間、魔界王女は恐怖に表情を凍らせる。

彼らは皆笑っていた。口元を歪め、嘲笑の視線を向けてくる。

「ど、どうということだ!? お、お前達……まさか……」

この表情だけで答えは出ていた。

「そういうことだミオレシア……。素直に滅びろ」

人を見下すような感情を込めた言葉が発せられる。

魔神にとって必要なものは他者をねじ伏せ、従わせるだけの力——それが無いものに生きていく資格などない。

ファガレスタに従うように、家臣達が一斉にミオに向かって飛びかかってくる。

「——ひっ」

彼らの肉体から発せられる殺意。これを感じた瞬間、ミオの口からは悲鳴が漏れた。

(殺される)

六名家の当主というにはあまりに貧弱な魔力しか持たないミオに勝ち目などない。魔界王女は見た目どおりの少女のように、怯えながら瞳を閉じようとした。

刹那——

「大丈夫ですよ姫様」



ど一撃で消し飛んでしまうほどの力の塊が二つ、過つことなく腹心へと向かう。

「……愚か」

けれどカレンは顔色一つ変えない。魔力弾に対し本当につまらなそうに一言呟く。すると、ただそれだけで魔力弾は消滅した。いや、それだけじゃない。攻撃を放った魔神達すらも消え去る。

「ば、馬鹿な……」

ファガレスタが驚愕の声を上げた。先程見せていた余裕は最早微塵も感じられない。

「そこまでの……ち、力を持つていて何故……どうしてミオレシアなどに忠を尽くす!!」  
ファガレスタの問いが飛ぶ。

「何故? 決まっています。信じているからですよ。姫様の力を……。姫様ならば必ず魔王になる」と

これにカレンは顔色一つ変えず、それがごく当たり前のことであるかのように答えた。言葉の中に嘘はない。生まれ落ちてから二〇〇年間、ずっと彼女と共に過ごしてきたミオにはそれがよく分かった。

「残念でしたねファガレスタ。貴方は二つミスを犯した。一つは私の力を見誤っていたこと。もう一つは姫様を侮ったことです。万死に値しますよ」

静かな口調だったが、周囲が冷え冷えとしていく。

「し、死ぬのはき、貴様だあああつ!!」

カレンを中心に放射状に魔力が広がる。その圧倒的な力を前に、魔神は城を揺るがすような咆哮を上げた。一撃で街一つを嘖き飛ばしかねないほどの魔力弾を作り出し、それを解き放ってくる。

「か、カレンツ!!」

殺される。あの魔力弾を受ければ、いかに彼女でも無事では済まない——ミオは血の気が引いていくのを感じた。

「大丈夫ですよ姫様」

しかし、忠実なる家臣は何事もないかのように微笑み、魔力弾に向かって右手を突き出した。

「ファルム・エグゼス・ラ・ファリエール」

歌を歌うかのようにスペルを刻む。

「な、ば、馬鹿な——」

発動するカレンの魔術——ただこれだけで巨大な魔力弾は消滅した。その上、ポロポロとファガレスタの身体まで塵のようになって消滅を始める。

「こ、こんなことが——こ、この俺が……どうしてだ！ 何故貴様ほどの力がありながらああああ!!」

理解不能——最後にファガレスタが浮かべていたのは、そんな表情だった。

「終わりました姫様」

彼の消滅を確認し、カレンは微笑む。

「あ……ああ……ご、ご苦労だったな……」

主としてミオはこれに答えた。ただ、彼女の顔を真っ直ぐ見ることができず、魔界王女は俯いた。

\*

数日後——ミオはカレンと共に魔界のとある名所にやってきていた。

ロードラディシユファルレアン——ラディシユ家初代当主ギアガードⅡファブレⅡリム  
ーブⅡラディシユ生誕の地である。

とはいっても何か特別なものがあるわけではない。巨大なクレーターが広がっているだけの場所だ。大きさは確か人間界——地球とほぼ同程度のはずである。

ミオがここにやってきた理由は、カレンに誘われたからだだった。二人で並んで荒涼とした大地に座りながら、どんよりとした魔界の空を見上げる。

「……どうしてだよ？ どうしてカレンはボクなんかに仕えているんだ？」

しばらく黙ったまま空を見つめ続けた後、やがてミオは耐えかねたように口を開いた。上半身を起こし、家臣を見つめる。

「ずっと……ボクなんかよりずっと強い力を持っているのに……何故カレンはボクに仕える？　なんで!!」

ファガレスタがミオに向けた言葉、あれは事実だ。

魔神に必要なもの、それは血統ではない。力である。魔王となる資格を有する六名家の当主でも、力がなければ淘汰される以外にない。それが現実だった。

そしてミオには——力が無い。それは痛いほどに理解している。ファガレスタの裏切りも、ある意味当然といえれば当然のことだ。

「儀式が始まるまで、あと一〇〇年……ボクは絶対に勝てないだろう。それは誰の目にもだつて明らかだ。ボク自身それを理解しているんだから……。だから、ボクに仕えている意味なんかない！　それはカレンにだつて分かるだろ!!」

拳を握り、肩を震わせながら、普通の家臣達の前では決して見せない本音を吐き出す。

「……確かに。魔王になることのできない魔神に仕える意味などありませんね」

これに対し、カレンは素直に頷いた。途端にズキンッと胸に痛みが走る。分かっているもやはり辛い。自然とまなじりからはポロポロと涙がこぼれ落ちる。

「泣かないでください姫様」

するとカレンがこの涙を指で拭ってきた。彼女は圧倒的な力を誇る魔神とは思えないほどに、優しい表情を浮かべている。

「いいですか姫様……私は姫様が魔王になれると信じているから仕えているのですよ」  
微笑みをたたえたまま、そうカレンは呟いた。

「……嘘だ」

反射的に拒絶の言葉を返してしまう。

「嘘ではありません。私は姫様を信じています」

けれどもカレンは一步も引かない。真っ直ぐこちらを見つめてくる瞳の中に、嘘があるとは思えなかった。二〇〇年間片時も離れたことはないミオには、彼女が真実を話していることがよく分かった。

「どうして？」

何故そう言い切れる？ 自分自身でさえ、自分の力を信じられないというのに……。

「簡単なことです。だって私は姫様をずっと見てきましたから……不敬な言い方かも知れませんが……」

そこで一端言葉を切り、カレンはミオの身体を抱き締めてきた。温かな体温が伝わってくる。

「私にとって姫様は妹の様なものです。家族のことが分からない姉がいると思えますか？」  
心の奥底にまで染み込んで来るような言葉だった。

「カレン……」

補と名乗るに、あまりに脆弱すぎる魔力だった。

（嫌だよ。助けてよカレン!! ボクには、ボクには力があるんじゃないか? カレンが信じてくれた力が、なんで發揮できないの? 助けて、助けてカレンっ!!）

豚などには絶対に犯されたくない。もがきながら救いを求めるように姉へと視線を向けるが、彼女は意識を失ったままであり、ミオの苦しみには気づいてくれない。

「ぶぐつぶぎつぶぎいっ!」

再び鳴く豚。巨棒の先から肉汁が溢れ出す。ねっとりとした濃厚汁が、ショーツを溶かした。これにより、ミオの女性自身が露わとなる。

未だ陰毛が生えそろわない幼子のような秘裂が、敵の視界に晒された。唾液に塗れながらも、花卉はぴっちり閉じている。そこにグチュリツと巨棒が押し当てられた。

「——ひいいいっ!!」

醜悪な肉棒の感触が伝わってくる。気色悪く滑るそれは、肌が火傷してしまうのではと思うくらいに熱く火照っていた。美しい純潔の花弁に触れるには、それはあまりにグロテスクすぎる。

「む、無理だ。は、挿入<sup>はい</sup>らない……そ、そんなもの挿入<sup>はい</sup>るはずがないっ!!」

ミオの表情が恐怖に凍った。首を左右に振る。この巨大な肉棒を挿入されれば、それだけで自分が壊されてしまうような気がした。

けれどいかに恐怖したところで想いは通じない。豚はどこまでも無慈悲であり、そして——一片の情すらも持ち合わせてはいなかった。

ぐぶじっ！　ぶじゅじゅじゅ、ぐぶじゅうっ！

「——ふぎっ！　ぎ、ぎひっ！　ぎひいいいっ!!」

満足に濡れてもいない未だ男を知らぬ秘裂を、巨棒が拡張していく。

「い、痛いッ！　ひっひっひ、ひぎいいっ!!　痛いっ！」

まるで身体の中に巨大な杭を穿たれているかのような感覚を覚えた。肉体が二つに引き裂かれてしまうのではないかという痛みが走る。悲痛な悲鳴をミオは漏らす。

「この程度で悲鳴を上げてどうします。本番はこれからですよ。いいですか、まだ半分も挿入<sup>は</sup>っていないんですよ」

瞳孔が開きそうなほどに瞳を見開いて苦しむ姿を晒しても、敵は同情など与えてはくれない。

「は、はんぶ——む、むっりだ！　こ、これ以上はは、挿入<sup>は</sup>らないっ!!」

絶望的な宣告に、顔色が変わる。

「や、やつめ、さ、させろ！　こい、つらをと、めろおっ！」

敵意は含んでいるものの、それは懇願にも近い言葉だった。

「申し訳ありません。発情したそいつらは、私でも止められないんですよ」

しかし、ラゼストは慈悲など持ち合わせない。他人事のように笑う。

ぐじゅぶるるっ！

「くひいっ！ んっんっんぎいひい！ あ、当たって、当たってる。ぼ、ボクの奥に当たってるう!!」

容赦なく突き出される腰。膣壁を押し広げながら、胎内を蹂躪する肉棒。やがてそれは膣奥で何かに触れ、一度動きを止めた。

「よかったですね姫様。初めての相手は豚ですって自慢できますよ」

肉棒が何に触れて止まったのか、魔神達は理解しているらしい。そこかしこでゲラゲラと笑い声が上がった。

「や、やめろ……そ、それだけは駄目。それだけは……こ、殺す。そこから先に進んだら、殺してやる！ みんな殺すぞ!! だから、だからやめろお……」

ミオも理解する。恐怖に凍る表情。脅しの言葉を吐き出すが、まるで泣いているようにも聞こえた。

「恨むなら無力な自分を恨みなさい……。さあ、貫通式です」

勿論聞き入れてはもらえない。残酷な宣告が魔界王女の耳に届き――

ブヂッ！ ブヂブヂブヂブヂブヂイッ!!

「ひぎいひいひいひい!!」

何かが胎内で引き裂かれていく音が聞こえた。これまで以上の痛みが身を襲う。ビクンッとして身体全体が痙攣するように跳ねた。凶悪な肉棒が膣奥まで達する。ズンツと子宮口を叩かれた。

結合部からは破瓜の血が一筋、垂れ流れ落ちていく。

「あ……あ……あああああ……」

身体の中に広がる異物感。膣壁を通して、それがどんな形をしているのか理解してしまふ。臍に涙が溢れ、ポロリッと零れた。

（お、おか……犯されてる。ぼ、ボクが……ラディシユ家の当主たるこの、ぼ、ボクが……ぶ、豚なんかにし、処女を……）

あまりに絶望的であり、最悪な現実——

「おめでとうございます。これで姫様も女になりました」

ばちばちと魔神達が拍手を始めた。

「おめでとうお嬢ちゃん」

「最高のロストバージンだなあおい」

「う……あ……やめろ！ い、いうなっ！ いうなあああああつ!!」

敵の言葉が事実を突き付けてくる。絶望色の真実を。認めたくなどない。子供のように首を何度も左右に振りながら「いうなっ！ いうなあつ!!」と繰り返す。否定したところ

で事實は事實なのだけれど、これは夢だと思いたかった。

「泣いてもだくめですよ。何しろ本番はここからですから。なくに、大丈夫です。痛みなどすぐに消えます。そいつらはどうしようもない下等生物ですが、女を悦ばすことに関しては一級品ですからね」

それでも現実には容赦してくれない。

「ぶひっ！　ぶひいいいいっ！」

ラゼストの言葉に従うように豚は鳴き声を上げると、処女を失ったばかりのミオに対して遠慮することなく腰を振り始めた。

「ぎ、ひぎいっ！　くひいいっ！！　う、うごくつな、動くなあああっ！！」

肉茎が膈壁を擦り上げる。途端に激しい痛みが再び全身に走った。豚のペニスによって内臓を掻き回されているかのような感覚に、悲痛な悲鳴を漏らしてしまふ。痛々しい姿だった。豚は心遣いを持たない。

「ぶひっぶひっぶひっぶひっ！」

己が本能の赴くままに、ヘコヘコとピストンを加えてきた。

（う、嘘だ。こんなの嘘だよお!!）

夢だと思いたかった。これが現実だと思いたくなかった。

が、事實は事實。どんなに心の中で否定したところで変わってくれはしない。

「ぬ、抜けえ！　ふぎっふぎっふっぎっ！　汚いものを、ぬ、抜けえ！　抜いてっ！！　抜いてよおっ！」

ズンズンッと膣奥を突かれる。そのたびに自分の身体がペニスによって貫通されてしま  
うのではないかと錯覚する程の刺激が身を襲った。

肉棒を突き込まれた結合部は、痛々しいほどに拡張してしまっている。パツクリ開いた  
秘裂から、ピンク色の柔肉が覗き見えていた。褻の一枚一枚が、肉茎に絡みついている。  
ペニスを押し込まれれば内側に巻き込まれていき、引き抜かれれば外側に捲れ返った。

六名家の当主にして、魔王候補が見せるにはあまりに無様な姿である。身を引き裂かれ  
そうな屈辱をピストンのたびに刻み込まれていつているかのようだった。

「お、お、大きくなってる。な、膣中なかでぶ、豚の、豚のが大きくなってる！！　ぐひっ、ぎ  
ひいひいっ！」

膣中なかで豚のペニスが膨張し始めていることに、やがてミオは気がついた。肉茎がビクビ  
クと痙攣しているのが、伝わってくる。

ずっちやずっちやずっちやずっちや！！

「ひ、ぎっ……あ、お、お腹、い、いっばいになっる！　お、大きすぎる。こ、これ、お、  
大きすぎるっ！！　息がつまっる！　は、はげっし、はげしすぎるうっ！」

これに合わせる様にピストン速度が上がっていった。フゴッフゴツという鼻息もより荒

いモノへと変わっていく。

「そろそろ射精でますよ。たっぷり膣なか中で受け取ってくださいね」

この変化の意味を教えてくださいましたのはラゼストだった。彼は静かに微笑みながら、絶望的な言葉を吐く。

「——ひっ！　そ、それだけは！　それだっけはあ！　た、頼む。頼むから！！　駄目だ！　それは駄目だあっ！！」

膣なか中に射精だされる。醜い豚の子種を子宮に流し込まれる——考えるだけで絶望が広がっていった。吐き気すら湧いてくる。恐ろしさのあまり、敵に救いを請うてしまう。

「頼まれましてもね……。先程もいった通り、発情したそいつらを止める術はないんですよ。だからすいません」

けれども返事は絶望的なものだった。

じゅぶっじゅぶっじゅぶっじゅぶっ！

「い、嫌だあ！　こ、こんなのいやだあ。か、カレン！　た、助けて！　助けてよカレンっ！！　やだ、やだやだやだやだやだやだあ」

身体の内側を穢されてしまう。豚に膣なか中射精だしなどされたたくない——ミオは子供のよう  
に意識を失った家臣に救いを求めたが、彼女が目覚めますはずもなく——

「ぶひいいいっ！」

これまで以上の鳴き声を上げ、豚が腰を膣奥に突き込む。

「くっひいいいっ！」

バチツと電流が走ったかのように、視界が一瞬白く染まった。

膣中<sup>なか</sup>で肉棒が破裂してしまふのではないかと思うくらいに膨れあがり――

どびゅぶつ！　びゅぶるるるっ！　ぶつびゆるるるうっ！

「ひっ！　あ、あ、あつつ！　あ、熱いのが、熱いのが入ってきた！！　だ、射精<sup>だ</sup>されてる！　ボクの膣中<sup>なか</sup>で、で、射精<sup>で</sup>てるっ！！」

射精が始まった。ドクドクとポンプの様に脈打ちながら、膣中<sup>なか</sup>に多量の肉液を注ぎ込んでくる。胎内に熱液が広がっていくのを感じた。

「い、嫌だっ！　いやだああああああ」

覚えるものは絶望。胎内に豚の子種が染み込んでいくのが分かる。内側から肉体を腐らされている様な気さえた。

「あ、ま、まだ射精<sup>で</sup>てる……も、もう射精<sup>だ</sup>すな……これ以上ボクの膣中<sup>なか</sup>に射精<sup>だ</sup>すなよお」  
懇願は通じない。豚の射精が終わるまでの――まるで永遠の様にすら感じる時間を、ひたすら耐え続けることしかできなかった。

「うあ、ああああ……汚された。ボクの……ボクの身体が汚されちゃったよお……」  
結合部からブジュリツと溢れ出すほどの量を注ぎ込まれた。屈辱と絶望にミオは涙する。

の意味」

ラゼストが浮かべる笑みは、まるで死に神の微笑みのようだった。

\*

じゅぶつ！ ごじゅぶつ！！ ぶじゅぶつ！！

「おっ！ んほおおおっ！！ こ、こんなの、む、むっりだ。は、挿入はいらない！ や、やめ  
つろ！！ やめろおおおっ！！」

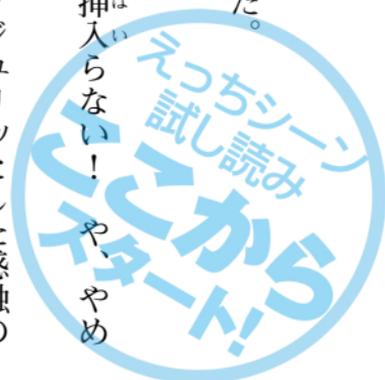
芋虫がミオの身体にのし掛かってくる。体表を包み込む粘膜のグジュリツとした感触の  
気持ち悪さに肌が粟立ったが、それ以上の嫌悪感がミオを襲う。

芋虫の股間部から伸びるペニスにも似た触手が、膣中なかに突き込まれてきたからだ。

膣道が肉触手によって拡張されていく。先端はすぐに子宮口に到達し、そこを押し開き  
始めた。

「おっ——おほっ！ い、いれるっな！！ こ、これ以上、は、はいらなっ！ も、もう  
パンパンだから挿入はいらないっ！！」

黄緑色をしたグロテスクな蟲によって犯されるといふ嫌悪、屈辱は当然あったが、それ  
以上に子宮が精液で限界まで膨れあがっているということが問題だった。子宮内にこれ以  
上何かを注ぎ込まれたら、本当に肉体が壊れてしまうかも知れない。蟲によって犯し殺さ  
れる——これ以上の恐怖はない。



「ご、ごろずつ！　そ、それ以上挿入れたら、こ、殺してやるう！！」

自身の魔力を必死に集中させようとする。

ぐじゅぐつ！　ぼじゅつ、ぐじゅぐおおつ！

「ふひいっ！　ひっひっひいっ！！　お、は、はいつで、はいつで……。ぼ、ぼぐのしぎゅうに、む、蟲のち、チンポがは、はいつぢやつでるう」

だが、集まりかけていた魔力は、子宮内に肉先が挿入されたことによつて一瞬で霧散してしまった。

「お……おっおほつ……い、嫌だあ。こ、こんなの嫌だあ……抜いて、抜いて抜いて抜いて、抜いてよおお」

子供のように懇願してしまう。しかし、まともな知能を持たない蟲に言葉が通じるはずもなかった。

「さあ、始まりますよ」

ラゼスタの表情が興奮に歪んでいく。

「は、始まる？　なに——ぐひいっ！」

ごぼじゅつ！　ぼごつ、ぼごじゅるるう。

問いかげに対する答えは、子宮内の変化によつて行われた。

膨れあがる蟲ペニスの先端部が開き、たっぷり白濁液が詰まった子宮内に卵を流し込ん

でくる。蟲の産卵が始まった。

「おっ！ うほっ、うほおおおっ!! は、はいっでぐる。な、なにがが、し、しぎゅうのながに流れ込んで——ひいひいっ！ い、いぐっ！ いぐうううう♥」

卵は一つ産みつけられる分けではない。蛙が産むソレの様に、尋常でない数が腔中なかに流れ込んでくる。たつぷり溜まった精液を吸収しながら、子宮壁に蟲卵がめり込んでくるのが分かった。この感触がミオを絶頂に誘う。気持ちいいのに気持ち悪い——快感と嫌悪が混ざり合う。最悪の絶頂だった。

「し、死ぬ……ほ、ほん、とにし、んじゃう……。やぶれつる。お腹がほんろにやぶれりゆう——ふひよっ」

じゅずぼつと産卵を終えた肉棒が引き抜かれる。パツクリ開いた腔口から、ビュツビュツと愛液が飛び散った。

「ふふ、すぐに子供が生まれますよ」

この様を見るラゼストは嬉しそうだ。

(子供？ あ、い、嫌だ……。こ、こんな下等生物の子供嫌だあ)

もしそんなことになれば、六名家の誇りがズタズタにされてしまう。絶対に回避しなければならぬ。

「んっんんん！ ふーふーふーっ……んぎいいいっ!!」

その為にすべきこととは何か？ 思いつく手は一つしかなかった。

ミオは拳を握り込み、息み始める。顔を真っ赤に染め、プルプルと排便時のように尻を震わせた。

「で、でつて、ででぐれえ」

子宮から卵を排除しなければならない。絶対にだ。

「ひっ！ な、なつんだあ!? お、多くなつてる。た、卵が、ぼ、ボクのおながのながで、おおぎぐなつてらう!! おっおっおっおっ、おほおおおお」

ただ、どんなに願ったところで卵はミオを嘲笑う。散々流し込まれた白濁液を吸収し、二倍にも、三倍にも肥大化していった。

「ひいっ！ お腹!! ボクのお腹がああっ！」

胎内で成長した卵によつて、下腹部にぼこぼこ凹凸ができる。

「と、止めるっ！ これを止めるおおっ!! と、止めないと殺す！ 絶対に殺す!! 止めないと殺してやるうっ！ お、お前を殺すぞおっ！」

少女魔神にとつてこれは絶望的な光景だった。半狂乱になりながら、悲鳴と絶叫を織り交ぜた言葉をラゼストへと向けてしまう。殺すという言葉を使いはするものの、これは懇願だった。全力で救いを求めてしまう。

「そうなつてしまつたら無理ですよ」

が、やはり聞き入れてはもらえない。一言のもとに切つて捨てられた。そして——  
ぶじゅばつ！　ぶじゅんつ！　ぶじゅるるるうつ！

「ひっ！　ひいひいひいっ！！　は、はじけた。ぼ、ボクの腔な中でた、卵がはじけたあ！！」

桜色に上気する顔に絶望の表情が浮かぶ。

「ふふ、生まれたみたいですね。さあ、出産です」

子宮内で卵を割り、妖魔の子供が姿を現した。とはいえ、これで出産は終わりではない。本番はこれからだつた。

じゅぞつ、じゅぞぞつ、ぐじゅぞおおつ！

「や、い、嫌だ——ぜ、絶対に嫌だ。う、産みたくない。こんなの産みたくないっ！！」

一体どれだけの数が生まれただろうか？　想像もつかない。少なくとも数十——いや、下手をすれば数百はいることだろう。

それらの蟲が一齐に腔口に向かつて動き始める。子宮口が内側から押し開けられるのが理解できてしまった。

「お、う、産まれるな！　産まれるなあっ！！　ふぎーふぎーふぎー」

出産をするわけにはいかない。誇り高きラディシユ家の当主が、妖魔の子供を産むなどあつてはならないことだつた。

先程卵を排出しようとしていた時とは逆に、膣道を閉じようと力を込める。蛙みたいにひっくり返ったままミオは息んだ。

ごぶじゅつ！　じゅごつ、ぶじゅごおお。

「お——おっおっ……と、とまつ、止まらないいいいい！！　おっおっおっ、どまつで、どまつでぐれえええ！！　ふひつ、ひ、広げられる。膣中なかが広げられるうっ！！」

けれども数十……数百もの蟲を止めることなど叶わない。蜜壺はボゴリッと押し開かれ、膣口も内部から不気味なほどに拡張された。

「で、でつる！　う、産まれる……うまれちゃうう……。う、うみだぐない。うみだぐないよお」

ポロポロと涙が零れる。

「だ、だずげで、お願いだからだずげでえ……」

遂にはラゼストに救いを求めてさえしまった。

勿論彼は救ってくれない。薄笑いを浮かべながら、無言のまま首を横に振る。

「おねがいだがら、だ、誰でもいいから。ぼ、ボクをたずげでえ」

彼が無理だと悟ったミオは、今度は周囲の魔神達へと視線を移したが、彼らもにやついているだけで誰も救ってはくれなかった。

「か、カレン……カレン……起きてよ。ねえ、おぎでよお！！」

忠実な家臣であり、姉でもある最も大事な存在の名を呼ぶのだが、やはり彼女は瞳を閉じたままである。

「お、き、きたっ！　きたああああ！！　た、耐える……ふひーふひーふひー……耐えろお！！　ぼ、ボクは、ボクはら、ラディシユのと、当主だぞ……おっおっおっ」

遂に子蟲は膣口まで辿り着く。いつ産まれてしまってもおかしくない。ミオは最後の力を振り絞り、これを押さえ込もうとした。肉壁が痙攣する。愛液が押し出され、垂れ流れていった。

「ふひーふひーふひー」

それでも押さえ込む。膣道を収縮させ、胎内に蟲を留めようとした。

「……我慢は身体に悪いですよ」

そんなミオをラゼストが嘲笑う。いつの間にか敵はこちらのすぐ近くに立っていた。二タニタと表情を歪ませながら、片足を上げる。

「ま、ましやか——」

彼が行おうとしていることを、ミオレシアは理解した。

「だ、駄目——お、おぼおおっ！！」

慌てて止めようと声を上げた次の刹那——上げられた脚が膨らんだ下腹部に下ろされた。潰れる肉。激しい圧力がミオを襲う。張り詰めていた糸がプチンッと切れる音が聞こえ

た気がした。

「で、でっる——でりゅう!!」

ぶじゅぼっ! どびゅばあああああつ!

これまで少女魔神を支えてきた堤防が決壊する。開く肉穴。多数の妖魔が産声を上げた。「ひっ! ひおおおおおっ!! う、うまれっる! よ、妖魔の子供が産まれるっ! ぽ、ボク……ボクが産んでる!! 産んじやつてるよお! や、いやだっ。いやだああ!! おっおっおっ、い、いっぐ! やなのに、よ、妖魔の子供産むなんて嫌なのにいぐっ! いっぢやうううっ!!」

全身を解放感が包み込んでいく。これが快楽に変換され、ミオを新たな絶頂へと導いた。「おっ、と、止まらないっ! あがちゃんどまらないよお!!」

絶頂を迎えても出産は終わらない。何しろ数は数十から数百に及ぶ。一度開いてしまったものを閉じることなどできず、ミオは妖魔を生み出し続ける以外になかった。

「い、イグのもの止まらない!! おっおっおっ、おーおーおーおー! いぎゅっ、いぎながらいぎゅっ! いっで、いっで、いぎまぐるのおっ!!」

愉悦に身体が蕩けていく。

びゅじゅばっ! びじゅるるるうっ!!

愛液を飛び散らせながら「あーあーあーあー」と言葉にならない嬌声を上げ続けること

しかでできなかった。

「あ、う、嘘だ……こ、こんなにやのうしよだあ……」

やがてすべての蟲を出産し終える。膨れあがった腹はもとの幼児体型に戻った。とはいえず、それを悦ぶ余裕などどこにもない。

ミオの視界に映るのは、小さな芋虫の大群——すべて自分の子供である。

「違う。こんなの違う。こ、こんなの夢だ。夢なんだ……」

現実から逃げ出したかった。

「ところがどっこい。夢じゃありません。これが現実。現実です！」

そんなミオをラゼストが嘲笑う。

彼がいうとおりだった。否定したところで現実が変わらない。こんなのは違うと叫んだところで、蟲の存在がなくなるわけでもなかった。

それぞれどこか、産まれたばかりの蟲達が魔界女王の肉体に取り憑いてくる。ニチャニチャと肌の上を這い回りながら、ツルペタな胸に吸いついてきた。

ちゅばっ！　ちゅばっちゅばっちゅばっ！

「ひあああああつ！　あつあつあつ、や、な、なんだ？　何これ？　んんんん。す、吸ってくる。ぽ、ボクのおっぱい吸ってくるう!!」

多数の蟲が乳房に取り憑き、サクランボのような乳頭に吸いついてきたかと思うと、激しい吸引を開始する。

乳首を吸われた途端、ビクリッと肉体は跳ねるように震えた。敏感に改造されてしまった肉体は、ただこれだけで快楽を覚えてしまう。

「や、す、吸うなっ！ んあっあつくひいつ！ お、おっぱい吸うなあ!! そ、そこはっ!? そ、そこはおっぱいじゃない！ あっ、そ、そこも吸っちゃだめだあ」

吸引は乳首だけには限らない。乳頭からあぶれた蟲達は、白い肌を吸い始める。身体中を蟲によって吸引された。

「で、でちやうっ！ ぜ、全部出ちやうう…… おっおっ、ぼ、ボクの全部がでちやうよお!! あっあっあっあああああ」

体液をすべて吸い出されてしまうのではないかとさえ思えてしまう。

「い、イクよおっ！ ぼ、ボク……い、イッちやうよお……」

何も分からなくなる。頭の中をグチャグチャにされているみたいだった。

「はへあああああ」

うっとり瞳を細めながら、静かに達する。

吸引活動を終えた蟲達はまるまると太っていた。

ポロポロと涙が零れる。

（し、死にたくない……。こ、こんな死に方したくない……。嫌だ。食べられるなんて嫌だ。絶対にいやだあ……）

誇りなど恐怖の前には簡単に霧散してしまう。カレンを守ろうという気持ちさえ、一瞬で消え去ってしまった。

「やだ。た、助けてッ！ 助けてええええっ！ いやっ！ いやだ！ こんなやだあああ!! 怖い。怖い怖い怖い怖い。し、死にたくない。死にたくないよお」

幼子のように泣きじゃくる。

「だ、だずげで……。なんでもする……。なんでもじまらずから、だずげでえええ。ボクをたじゆげでええええ」

ラゼストが憎むべき裏切り者であることも忘れた。誰でもいい。この状況から救って欲しい。頼むから助けて……。

「——駄目です」

願いは通じない。たった一言のもとに切り捨てられる。

「ひっ、ひいひいっ！」

同時にナマコの口の中に、ぶら下がった手の先端部が入った。

「や、やだっ！ ひやあああああっ！ だじゆげで、だじゆげでえええええっ!!」

熱気が腕を包み込む。この瞬間、ミオは半狂乱になった。

「ひっひっ、ひいひいひいひいっ！」

必死に身をよじる。この状況から逃れようともがく。だが、どんな抵抗も化け物の前には通じない。遂には腕だけでなく、上半身まで飲み込まれる。

「おぼごっ！ ぶごおっ」

ジュルジュルとナマコは活け作りの魚を飲み込むように、ミオを吸う。

じたばたと下腹部から下半身が足掻いていた。

じよっじよっじよぼろろろろお。

遂には失禁まで始まる。

(だじゆげでえ。じにだぐない。じぬのはいやあああああああ)

悲鳴は誰にも届かない。暴れても暴れても、襲い来る死からは逃れることができなかった。遂には足先まですっぽり飲み込まれてしまう。

「むぼっ！ んぼッ！ おっおっ、んおおおおっ」

しかも、ただ飲み込まれるだけでは終わらなかつた。ぎつちり肉に挟まれた肢体に、幾本もの触手が伸びてくる。

「んぶえっ！ ほぼっ！ んぶべろおおお！ ふごっ、おごおおお」

(な、なっつが、か、からだのながにまで、ば、ばいつでぎだああああつ！ お、おじり

っ！ おじりおがざれでるう！！ おっおっおっ、ま、まんごっ！ わだちのおまんごもお）  
 ヴァギナ、アヌスが侵食される。ツルペタな乳頭にも細長い肉紐が挿入された。更に触  
 手は口腔をも塞ぐ。

「ぐぢっ！ お、おッぐはいっでぐるう！！ うぶえっ、おぶえええええ」

ただ口の中を蹂躪するだけではない。喉奥から食道、更に胃の中にまで侵入してくる。

（づ、づながるっ！ ぼ、ぼぐのおながのながで、しよぐじゅがづながるう）

胃の中にまで到達した触手は口腔の一本だけではない。直腸を犯す肉紐までが到達する。  
 この二本が体内で繋がりがあつた。

（か、かんづうじでる。触手で身体をかんづーしゃれでるう）

「ふぶえ……ふへえええええ」

ビクンッビクンッと肉体が震えた。

そこまでしてなお触手陵辱は終わらない。伸びた肉紐は鼻の穴や耳の穴まで犯す。尿道  
 まで押し開かれ、再び失禁してしまった。

（か、かきまじえられでるう。ぼぐのあたまのなが、ぐちやぐちやになっひやうう）

脳髓までも犯されているかのよう。無残という言葉だけでは表しきれない、悲惨で、陰  
 惨な陵辱だった。

（あべああああ。ぎ、ぎもちいい♡ しゅごいぎもちいいのお♡）

が、ここまでされてなお、肉体は快楽を覚えてしまう。いや、ここまでされたからこそ、身体は苦しみから逃れる為に快感を覚えたのかも知れない。

ずごっずごっずごっずごっずごっず！！

「ぶふあああああつ！ うつぶえ、おっおおおおおつ！！ 詳しい♥ びいいいっ！ ぶえつぶえつぶえええ」

体内を犯す触手が、ピストン運動をするように蠢き始めた。喘ぎ声というにはあまりに悲しい呻き声が漏れる。

（い、いいいっ！！ ぎもぢよずぎるう♥ ごっれ、これじゅごいのおおお！ もつろ、もつろおがじで、おがじでええええ♥）

しかし気持ちがいい。この快楽を否定することなど絶対にできない。触手に合わせて腰を振り出しさえしてしまった。

この求めに応じるように、触手はピストンだけでなく、吸引まで始める。体内を犯す肉紐の体表にいくつもの吸盤のようなものが出現したかと思うと、

じゅずるるるるるるうっ！！

ミオの体液を一滴残らず吸いつくさんとばかりに吸ってきた。

（んっひああああ♥ す、すわれっでる。じゅわれでるう♥ ぼぎゆの魔力がしゅわれぢやっでるう♥ ご、ごんなの、し、死んじゃう。ほんろにじんじゃうよお♥ れっも、

れもきもちいい♥ 魔力じゅわれるのいいのおお♥)

命そのものを吸われているといっても過言ではなかった。魔力を吸引されればされるほど、肉体は死に向かっていく。そのことをミオ自身も理解はしていた。していたけれど、心地よかった。命が目減りしていく感覚に、どうしようもない快楽を覚えてしまっていた。(い、いぐよっ！ ぼぐいぐっ!! ごんなのだえられない。いぐのっ！ いのちしゅわれでいぐのおお♥)

「んぶへつぶへつ、んぶえええええええ」

触手によって身体中の穴という穴を犯されながら、それでもなおミオは笑った。限界以上はまだ口を開きながら、瞳にうっとりとした色を浮かべる。

絶頂が近い。

じゅずぼっじゅずぼっじゅずぼっじゅずぼっ！

それを触手も悟ったようにピストン速度を更に上げていく。一回蠢くたびに触手の肉胴は太さを増していった。体内から身体をドロドロに溶かされてしまうのではないかというくらいの快感が走る。ビクビクと肉紐全体が震え出した。そして――

ぶびゅばっ！ どびゅばああっ!! ぶっびゅるるるばああああああっ！

「むほおおおっ！ おぼっ!! んぶおおおっ！」

精液にも似た体液を撃ち放ってきた。触手体表の吸盤の一つ一つから、肉液が溢れ出し、



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**